

勝手に俺を殺すな。目の前の美少女が俺だぞ。

最強雄筋肉チンポバトル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

悪魔をブチ殺すために決死の覚悟で自爆したら、生きてた上に女の子になった。こんなことある？

# 目次

バフオメツトって知ってる	
?	1
主人公つてのは大抵遅れてやつてくる	
11	
やると言ったらやる『スゴ味』があるツ!	
19	
万里の波濤を乗り越えて	
26	
ヤギつてなんだよ	
34	
お料理、得意なんです!	
44	
交代してくれ	
52	



## バフ オメツ ト っ て知ってる？

世の中には大きく分けて2種類の怪異がいる。キリスト教的怪異の「悪魔」と、日本古来の怪異である「妖怪」だ。もちろん彼らは怪異の名に恥じず、人間に危害を加えたり争いを起こしたりする。そんな怪異との争いを調停し、危害を加えるものを討ち祓うのが、平安時代の陰陽師に始まり現代まで脈々と続く対怪異のエキスパート、「魔法使い」である。

今の高校じゃ対魔術を習わないところはない。文科省の定めた必修科目に入っているからだ。しかし悲しいかな、対魔術の授業をまともに受けるやつはごく一部。理由は簡単で、要は才能がないと本当にどうしようもないから。才能があるやつはトントン拍子に力をつけていって異能力を制御できるまでに成長するが、俺たち才能ナシはまずそもそも異能力がないか、あつてもめちやくちや弱いかのレベルであり、どれだけ練習したりしても強くなることはない。結局は生まれ持つての才能で全てが決まるのだ。バカバカしい。だから、俺の知り合いでこの授業をまともに受けてるやつなんていない。1人の例外を除いて。

対魔術の授業をまともに受けるクソ真面目な彼の名前は土御門つちみかど晴はる。土御門の名の

通り彼はどうやら安倍晴明の末裔らしい。安倍晴明といえば誰もが知る陰陽師の中の陰陽師、マスター・オブ・陰陽師だ。もうこれ主人公だろ。

彼は自分の実力をひけらかすことは無いものの、端々で彼が安倍晴明の末裔の名に恥じぬ活躍を見せていることは誰もが知っている……こともない。うまく隠し通せているっぽい。有能すぎて俺なんか勝てる要素が見えない。

そもそも安倍晴明の末裔とかいう主人公補正バリバリに入りそうな血筋もいかなものか。物語の中盤で晴明の力に覚醒するとかなんとかありそう。

いやもうそれだけに止まらないのが土御門さんのすごいところである。

彼は他人を寄せ付けない。俺がしつこく会話を試みようとしても、「俺に関わると口くなことにならないからやめてくれ……」の一点張りである。しかし、さらにしつこく遊びに誘ってみたりすると少しづつ心を開いてくれた。ような気がする。今でもまだ距離は感じるが。いまだに遊びに誘ったら3回に1回は断られるし、学校で喋らないこともままある。それでもそんな俺が彼の一番の友達なんだからなんか哀しくなるな。

俺の気に食わないことを、ご紹介しよう。ヤツのハーレムだ。そりやまあ主人公みたいなやつのみわりには女の子を侍らすっていうのは古代から相場が決まっているものだ。でもなんとなく、そこはかとなんか気に食わない。日替わりヒロインはやめた方がいいと思うよ、いつか刺されそうやし。何人いるかなんて考えたことすらない。考え

るだけで腹立つし虚しいから。うらやまけしからん。高校生の不純異性交友なんておじさんがお仕置きしちやる！イチャイチャしくさりやがって。腕に密着されたって、正面切ってハグされたって土御門くんは全く動じない。EDか疑いたくなるほどだ。たが俺は知っている。ああ見えて内心穏やかではなく、必死に理性を保っているということ。滅多に話しかけてこない彼が俺にはじめて話しかけてきた時の相談が「異様に距離が近い女の子との接し方を教えて」だった。張り倒そうかと思つた。その時は、「もう流れに任せちまえよ」ってテキトーに対応したらめちやくちや嫌そうな顔をされた。

平和だった。特に怪異による人死にも悶着もなく、高校生活をエンジョイできるぐらいには。

それと同時に、つまらなかつた。所詮俺は主人公ではなくたまに出てくるモブ。たまに怪異が現れてもどこかの誰かさんたちが片付けてくれるおかげで俺みたいな無能の出番も特になし。毎日毎日、薄く引き伸ばされたような同じ日々を送るだけの生活だ。どつかにおもしろいモノでも転がってねえかなあ……

なんて考えるのは今日限りでよそうと思つた。明日からはこの平和さに感謝して生きようと深く反省した。まあ、生きて帰ればだけど。

学校からの帰り。普段とは違うルートの帰り道で。目の前の交差点で、信号を振り回して暴れ回る怪異に目をやる。人間のようない身体に、顔と足は羊のような形をして

いる。背中にはコウモリのような翼が生えていて、なんというかめちやくちや気持ち悪い。アンバランスさに目を背けたくなる。

『ウオオアアアアアア!!!』

怪異が勝鬨を上げるように吼えたと、身体が言うことを効かなくなる。腰が抜ける。眼前の様相はまさに地獄だ。人間が何人も折り重なるように倒れており、道路は至る所が派手に凹んで隕石のクレーターのようになっている。異常事態に駆けつけた魔法使いもつい先ほどワンパンンされちゃった。こんな地獄を見せられてしまえば、俺にできることなんて路地裏に息を潜めて隠れるぐらいしかできない。死ぬ前にせめて親に連絡でもしようと思える手で携帯を取り出そうとする。クソ、もどかしいな。全然取り出せ……

カシヤン、と呆れるほど軽い音を立てて携帯が転げ落ちる。

『……いそこの、路地裏にイる人間、出テこい……』

あ、バレてる！

わりい、俺死んだ！w

でもよく考えれば、俺が時間稼ぎすれば土御門たちがこいつぶつ殺してくれるまでの時間潰しになるか。そう思えばなんか気が軽いような気が……やっぱしないわ。生きたい逃げたい帰りたい。死ぬならハンター×ハンターの最終話が出てからがよかった。



でもよく考えたら俺、ハンター×ハンター読んだことなかった。ダメだよつば。思考が追いつかないし空回りしてわけわからんことが頭ん中でぐるぐる回り続ける。そんな頭の中で考え出した結論、それは。

「俺は……こ……こ……逃げも隠れもしない！」

『ほう、度胸ガあるな……』

度胸なんてねえよ。頭をオーバークロックさせたら訳の分からない答えにたどり着いたんだよ。ああ俺、今から死ぬんだなあ。死ぬ前に一回女装でもすりやよかつたな……ん？何言ってるんだ俺？女装？どっからこんな考え出てきたんだよ。もういいや。どうせ死ぬし。

『え、いや女装癖持ちはちよつと……』

「お前普通に喋れるんかい！」

『あ……いや少シ動揺してしまつてナ。問題ナい』

「もうお前問題しかないよ。てか俺、声漏れてた？」

『それはもうばちこり』

もう殺してくれ。いや嘘、死にたくはない。もうなんか感情がごちゃまぜになって放心しそうになってきた。

にしても何なんだよこいつは。こんなにかつい見た目でキャラ作ってるのかよ。も

うこれほぼ放送事故だろ。俺が視聴者ならキレてる自信がある。クソ作品間違いなシだ。

『お前、取り引きをしないか？実は俺も暴れ疲れてそろそろ帰りたいんだよ』

何を言ひ出すんだこいつは。悪魔らしいことをいいやがって。あ、そういえばこいつ悪魔か。じゃあ仕方ないなアツハツハ。いや笑い事ではない。

「拒否する……と言えば？」

悪魔との取り引きなんて大抵はロクなことになりやしない、と昔に本で読んだことがある。例えば永遠の命の代わりに自分の精神を持っていかれて永遠にノイローゼで生きることになったり。例えば敵対する国の征服の代わりに自国民の半分の命だとか。つまり悪魔とはそういう生き物だ。

『殺す』

「最初から拒否という選択肢はナシか……」

『で、どうする？』

「わかったわかった。受けるから条件を言ってくれ」

どうせ拾った命だ。大事にしたい。あまり刺激せずに落とす所を探すしか無さそう。気を取りなおして悪魔との取り引きの内容を聞こうとすると、ニヤリと、まさに悪魔のような笑みを浮かべて口を開いた。

『俺を見逃す。代わりにお前にはその辺の人間よりもずっと長い命をやる。好きに生きる。拒否する場合は、殺すかそれに匹敵する呪いをかける』

「イヤだね。ていうか、どうせもうそろそろ土御門が来るだろうし。お前祓われるよ」

『俺を祓う？ハツハツハ!!はあ……ふう……ひーつ、片腹痛いわ。現に今さつき襲ってきたエクソシストだつて歯が立たなかつただろう？』

事実だ。しかしこいつは土御門をナメている。ぜひナメたまま死んでほしいところではある。だつてあの土御門だぜ？妖怪の首領的な、ぬらりひよんを祓うことはついぞ叶わなかつたものの、対等に戦つた男だぜ？なぜ俺が知っているのかつて聞かれると耳が痛い。休日何してるんだろ、と思つてストーリーカーしてたらガチバトルしてる現場にエンカしちゃいましたなんて口が裂けても言えない。

閑話休題。俺は時間さえ稼げれば……

『まあその土御門？とやらがもし強いとするのであれば、弱っている今祓われるのは不快だな。お前を殺して疾く去るとしよう』

言うが早いが悪魔は俺の顔を持ち上げてギリギリと締め上げてくる。言葉にならな  
いほど痛い。

時間さえ稼げないのか俺は。無情すぎる。

しかしここでようやく俺の命に価値が出てきそう。どうやらアレを使うしかない

ようだ。

俺はおもむろにズボンのポケットから取り出したロケットペンダントを悪魔に見せつける。

「ほへえがなんひやかわかりゆか？（これがなんだかわかるか？）」

『な、お前それは……!!』

「ひやつひやつひやつ！ほへとほもにひねい！（ハッハッハ！俺と共に死ねい！）」

どうやらコイツはわかっているらしい。このペンダントが自決用の小型爆弾内蔵だということ。ペンダントを開けると起爆スイッチが作動して、俺の身体を跡形もなく消し去るという算段だ。親戚が対魔過激派宗教に入っててよかった。好奇心でこれの家からくすねてこなきや俺は人類の役に立てなかった。ちなみにこのペンダントは家はまだ1ダース分ぐらいある。

「ひゃあな！ふほはふま！（じゃあな！クソ悪魔！）」

『クソ人間風情がああああああ!!!呪ってやるぞ!!!』

圧倒的力を持つ生物の怨嗟というのは存外に心地良いモノだな、と考えながら俺はペンダントのスイッチを押した。

瞬間、走る閃光。それと同時に轟く爆音。

『グガアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』

じゃあな。クソ悪魔。天国で待つてるぜ。

目を開く。ハテ、ここはヴアルハラかと思えば空は青いし地面はアスファルト。足元には羊顔の悪魔。右にはひしやげて折れた信号機。左には倒れた人の山。

………アレ!?俺、生きてる!?

「よかった……!?!」

なんだ?自分の喉から女の子の音がする。ヘリウムガスでも吸ったか?

「あーあーあ……ウソでしょ……」

いや、そんなもんじゃない。これはどっからどう聞いても、本質的な、女の子の声だ。

ありえない。こんなことありえるのか?ガタガタと震えながら歩いて、道路に転がっている自分の携帯を拾う。よかった、まだ起動する。画面のガラスはバキバキに割れているけど、修理すりゃ直る。カメラを起動して内カメラに切り替える。恐る恐る覗いてみると――

銀髪赤目の少女が写っていた。

ああクソ。これが。

これが、  
悪魔の呪いかよ——

## 主人公つてのは大抵遅れてやってくる

オレが走って現場にようやくたどり着いたのと、閃光と轟音が広がったのはほぼ同時だった。それが爆発だと認識できたのは、自分の身体が吹き飛ばされて起き上がった後だった。

あまりにも唐突に起きたことのせいで、頭が追いついてこなかった。ああ、今日は宮本たちと一緒に来なくて良かったなあ、なんてことを考えていた。

着いた瞬間にこれだ。怪異が起こした爆発なら悲惨。人間が起こした爆発ならもつと悲惨。どつちに転んでも事態は良い方に転ぶことがない。……いや、ウソをつくのによそう。人間が起こした爆発の方が怪異もろとも吹き飛ばすからラクなのかもしれない。後処理は国の仕事だ。

「はあ……」

思わずため息を吐く。今日も自分の無力さを思い知らされてしまった。もつと強くならなければ、人を守ることなんてできない。土御門の名にかけて、人に危害を加える怪異を見過ごすことなんてできない。

そう、オレの名前は土御門 晴。

かの高名な陰陽師であり、京を恐怖のどん底に陥れた鬼の頭領、酒吞童子の正体を看破して大江山征伐に大きな貢献をしたとして今でも伝説として多く語り継がれる安倍晴明の末裔。

オレは当代随一の能力者と囃し立てられているが、そんなことはないと思っっている。攻撃能力じゃウチの清掃部……という名目で活動している対怪異部の宮本に一步譲る。身体能力なら敷島に。頭脳なら後輩の朝香に。生命力なら藤谷先輩に、といった具合だ。オレが一番強いなんてありえない。世界は広いのだ。

中学から高校に上がったとき、怪異はオレ一人で倒し尽くすことができると思っで思っていた。思い上がりではない。本当に、心の底からそう信じていた。でも、入学初日でその思いは打ち砕かれることになる。その日の帰り道に現れた怪魔は今まで相手取っていたものより随分強く、手こずった拳句に追い詰められた。あわや負けるかもしれない。そんな時に藤谷先輩が駆けつけて鮮やかな手捌きで倒していた様子を、オレは呆然と見つめていた。

悔しかった。悲しかった。辛かった。ロクにヤツと渡り合えなかったのが、受け入れられなかった。自分を無敵だと思っ込んでいた心は、ここでベキベキにへし折れた。思わず涙を流すオレに、藤谷先輩は困ったような笑みを浮かべてこう言った。

「キミは見込みがある。その制服はウチの高校だろう？ どうだ、”清掃部”に入らない



か？先輩たちが卒業してしまつて私しか部員がいなくてね……。ああ、”清掃部”ってのは表向きの名義さ。本来は怪異たちを打ち祓うのが私たちの仕事。まあ、表向きだとしてもちろん学校の清掃もやるんだけどね？」

オレは強い意志を以てして、清掃部に入部した。部室は随分とボロい。そこは部員の増えた今でも変わらない。

宮本は怪異の共同討伐から。敷島は申し出されたタイムマンを受けた結果。朝香は……よく覚えていない。なんか気が付いたらいた。犬のように着いてくる後輩だな、という認識だった。「え？先輩清掃部にいるんですか!?!じゃあウチも入部します！」の一言で来た時は真面目に説教をしたものだ。そもそも清掃部は一般生徒に募集しているものではなく、紹介で入れる部活らしい。高級クラブとか懐石料理屋かと思つて心底呆れた。

そんな個性的なメンバーに囲まれて、兎にも角にも見切り発車で出発したままオレはこの街を”清掃”しているわけだ。

閑話休題。回想終わり。目の前の事象に目を戻す。

眼前に広がるのは、隕石のクレーターを思わせるアスファルトの凹みが数カ所。それから、隅っこの方に人が何人も倒れて一か所に集められている。そしてメインである、頭と足が羊で身体が人間の、至る所に焦げ跡を残して倒れている怪異。あれは……バ

フオメットというやつか？見たところ生気はない……ように思われる。優先順位は1に市民、2に怪異だ。清掃服の狭い部屋にも「まずは一般市民の安全を優先せよ」という標語が掛けられている。まあ他にも「ドブネズミみたいに誰よりも温かく」とか、「カツプラーメンは2分半」とかわけのわからないものも貼つてあるけど。

転がっている市民に駆け寄つて手を取る。よかった、まだ脈はあるみたいだ。ほつとした。ここで人に死なれていたらオレは死んでも死にきれない。到着するのが遅かったという理由で人死を出しては清掃部の、ひいては家名の恥だ。とりあえずこの人たちはその場に置いておこう。ヘタに起こしたりするとパニックを起こしかねない。ちなみに2回ぐらい経験がある。1回目は藤谷先輩に爆笑され、2回目は宮本に呆れられた。「アンタそれぐらい学びなさいよ」と。まさにその通りだ。深く反省したので3回目はない。どうだ宮本、オレは偉くなつたろう。

脈を取つた手をそつと元の場所に戻す。さて、これからが本題だ。バフオメットらしき怪異の調査。ここまで大型の、それも名の知れた悪魔なのだから、調査をするのは必然と言える。警察に引き渡すと処分されちゃうからね。できるだけ迅速にセコセコとやる。

にしても——。もはや見事なまでの爆破痕と焦げ跡。相当強い威力で爆破されたのだろうか。ということは、爆破系能力者という線が考えられる。もしくは、今世間

を騒がせている対魔系過激派宗教の信徒の仕業か。彼らは怪異を滅することを主目的として活動しており、一般信徒には自爆用の携帯爆弾を持たせているらしい。噂話ではないが、IEDを作る練習もさせているとか。どれだけ爆発にこだわるのかと呆れたくなる。しかし現状、それぐらいでしか能力を持たない一般市民が怪異に対抗することはほぼ不可能だということだ。忌々しい。こういう惨劇を見るたびに、オレたちの使命を実感させられる。最近怪異の起こす事件が減ったかと思えばまたこれだ。やつらは何か目的があるのだろうか？

考えていても仕方がない。いずれわかること……だと思う。そんなことより、今はコイツの調査だ。写真を撮って記録に残さなきゃな、と思い、携帯を取り出そうとポケットに手をつまむ。そうだ、この写真を友達に送ってやろう。あの随分グイグイゴリ押しでオレと遊ぼうとするヤツに。

彼の名前は深山<sup>みやま</sup>冬紀<sup>ふゆき</sup>。クラスのみんなはフユと呼んでいる。オレもそう呼びたいのだが、いかんせん最初の方に冷たくあしらってしまったせいで、クールキャラが確立したのでそんなことができない。つらいものである。単純にグイグイくるせいで対処がわからなかった。オレの家柄、能力、その他諸々。付随するものばかり見る人間の中で、唯一冬紀だけがオレの内面を見てくれた。清掃部以外の人間で、しかも能力がない普通の人で。そんな人がオレと関わりを持つとうとするなんて、家柄や能力目当てだし

た思つてこなかったオレに人の優しさを教えてくれた。

あいつはどんな顔をするだろうか。はじめてオレから連絡が来たと思つたら怪異の死体だつたら引くかもしれない。というかオレなら絶対に、確実に、100%引く。ただのサイコパスじゃんね。

やつぱ遊びの予定でも連絡しておくか、あいつは年中ヒマそうだし、なによりもフツトワークがめちやくちや軽いから多分いつでもオツケーだろう。クラスメイトに遊びに誘われて断つているところをほとんど見たことがないし。

カシヤン、という間抜けな音を立ててポケットから携帯が滑り落ちる。

まあいいか、これももう何年も使つてる型落ちだし買い替え時だろう。にしてもすごい飛んでいくな。30mぐらい滑つていくじゃん。

「はい、落としましたよ」

自分以外の声があったのに驚く。しかも随分とまあ、無機質的で底冷えするような声だ。ともすれば他人を排除する意志すら感じさせるような。

そもそも、ここにはオレ以外いなかったはずだ。人の気配も感じなかったし、何よりも人が残っている方がおかしい。

警戒しながら顔を上げる。目の前に立っていたのは、全身がボロボロなのにどこか静謐な感じのする、銀髪の少女。それが、オレに落とされたスマホを渡そうとしていた。

「……ありがとう。キミは……どうしてここに？」

わからない。なぜ彼女がロボロボなのか。なぜ彼女がウチの高校の、それも男子用の制服を着ているのか。なぜ彼女に、こうも興味を抱いているのかも。

「……名乗るほどの者でもないよ。じゃあね、また会おう」

そう言い残すと、彼女はフラフラとした足取りでその場を去ろうとする。そんな彼女を見て、自然と口が動いてしまう。

「また会うつて……どういうこと？ いや、今はそんなことはどうでもいいや。そんなロボロボで動くと危ない。ウチの学校で応急手当でもしていこう」

「その必要はない。初対面なのにそんなに構ってくれるなよ……土御門」

何も言えなかった。まるで蛇に睨まれた蛙のように、彼女が視界から消えるまで呆然とするしかなかった。

どうしてオレの名前を知っているんだ？ どうして他人をそこまで拒絶するんだ？ どうしてそんなに圧をかけてくるんだ？ 聞きたいことは山ほどある。

「なんなんだよ、ホント……」

ちよつと待てよ？ そういえばあの子が持ってたカバン、冬紀が着けてた飾りと一緒のやつじゃなかったか？ くたびれ具合も似たような感じだった。これに関しては完全に思い込みかもしれないが。

一体全体どういうことだろう。あの子は冬紀と関係があるのか？もしそうなら、冬紀に聞けば分かるだろうが何故か嫌な予感がする。頭を回せ。お前の頭は帽子の台じゃないハズだぞ土御門。よつく考えろ。冬紀はカバンに3つ飾りを付けていたハズだ。土星のミニチュアと、馬のフィギュアと、近所にある神社の交通安全のお守り。しかしあの子が付けてたのは土星と馬だけだった。じゃあ冬紀のものではないのか？いや、あんな独特なセンスをしているのはあいつだけだ。

考えながらウロウロしているとふと足元に目がいく。本当に無意識の発見だった。バフオメツトの近くに転がっていたのは交通事故守りと冬紀が気に入っていた変な配色の腕時計。お守りはあちこちが真っ黒になっていて、腕時計は半分以上吹き飛んでい

る。  
ああ、クソ。何が対魔だ。友達1人守ることができないなんて。情けない。悔しい。腹立たしい。

足元に雫が滴り落ちる。泣いているのは、オレ？そこでようやく気付く。思っていたよりも、自分よことを気にしてくれる存在は大きいのだと。

やると言ったらやる『スゴ味』があるツ！

あーあーあーやっちゃったやっちゃったよ！クソ！最悪だ！身体中ボロボロで頭がガンガンする。そんなところで人に話しかけられたら対応冷たくなるに決まってるじゃん。バカか？バカは俺だけ。なんだよ、「また会える」って。そりやまた会えるっしょ、だって学校一緒なんだから。はあくつつかえ。やめたら？人生。やめられたらどれだけラクだろうなあ。

しかしまあ、もう方向性がわからなくなってきた。あそこで誤魔化さずに怪異のせいで女の子になっちゃいました！って言えばよかったのかもしれない。でも現実が違う。誤魔化しちやつたせいで、あいつの中では正体不明の少女としてキャラ確立してしまっただ。こうなったらやるしかない。俺は一度こうと決めたらテコでも動かない鋼の意志を持ち合わせた男だ。やると決めた以上退くことはできない。キャラを完璧に演じ切ってやる。高校2年3年の間だけだ。こんな短い期間なら俺でもやれる。やるんだな！今ここで！勝負は今ここで決める！

そうと決まればキャラ設定を考えるしかない。まずは、性格とか嗜好とか思考とか。ギャグじゃない。

自分で言うのもアレだけど、俺は元来陽気な人間だと思う。だからあんな冷徹な殺戮

みたいな言動は本来得意じゃない。気が立ってるのと疲れてるのと頭の処理が追いつかなかったからで自然とああいうムーブができたけど、もう一度やれと言われたら無理だ。というかなんであのタイミングで駆けつけてくるんだよ。ヒーローは遅れてやってくるってか。余計なお世話だからそのまま直帰してください。本当にタイミングの良い……いや、悪いのか？どっちだ？あいつが怪異を倒す見せ場を作らせることができなかったからタイミングが悪いのかもしれない。主人公がキツチリ倒してくれたら俺がこうならず済んだし。命投げ捨てる覚悟をしてまで自爆スイッチ押ししたのに生き延びただけでも恥ずかしいのに、おまけに呪い付きだ。これ家帰っても親に息子って認識されないんじゃないか？そう思うと怖くなってきた。それって……孤立無援、つてコト?!

今までの悪行の罰が当たったな。天網恢々にして疎に漏らさず、ということわざの通りこれは天罰なのかもしれない。冷蔵庫にある白米だけ全部食べたりとか、悪ふざけで友達と破壊した花瓶を知らないフリしたりだとか、そんなことしなければよかった。その代償で誰も「深山 冬紀」という人間を認識しなくなるのがツラすぎる。半分死人みたいなもんじゃん。戸籍とかどうするんだらうなあ。

そんな事は今考えてても仕方がない。キャラ設定の話に戻そう。



このまま帰るわけにはいかないの、とりあえず自販機でお茶を一本だけ買って家の近所の公園に居座る事にする。ここなら誰も来ないし、静かで考え事をするにはうつつけの場所だ。

さてどうするか。土御門に対応したみたいないな冷徹さを一貫したいが俺にその素質はない。じゃあどうするか？ここでご都合主義の設定を引き出そう。ああ、ちゃんと本を読んできてよかった。本つてか漫画とかラノベが大部分を占めるけど、こういうう時に役に立つ。やはり人生に無駄な事など無かった。

そう、俺の考えた最強の設定。それは「戦闘中だけ性格が豹変する」だ。どう？完璧じゃない？いやあく自分で自分を褒めたくなる。偉すぎるだろ俺。よし、あとは普段の性格の設定だ。これはまあ、普段の俺と変わらない感じでいいだろう。

気をつけるべき点としては、土御門のことを普段みたいに「ツツチー」って呼ばないコトだな。この名前で呼んでるの俺だけだし、この名前を出せばかなり怪しまれると思う。だからこの呼び方は封印です封印。さながら有害指定図書を躍起になって図書館から排除しようとするPTAのごとく目を光らせていなければならぬ。ポロつと出そうになるからね、気を引き締めていこう。

しかし――

ある「考え」が俺の心の中で首をもたげる。こんな事、実現してはならない。無視せ

ねばならない。でも、どうしても考えてしまう。俺の心の中で暴れ狂う。

この事態を楽しんでみてはどうか？

という考えが。

いささか危険すぎる。危険極まりない。

でも。なぜか。この状況を楽しまないと損だという思う気持ちが強まっていく。なぜか？俺はもう諦めてるんだ。元に戻れないっていうことが薄々わかっている。呪いをぶつけてきた怪異が死んだのにも関わらず、呪いが解けないということとはつまりそういうことだ。俺はもう一生戻れない。そういつた諦観の念がある。

じゃあ楽しまないと！この状況を！さっきまでの設定なんて丸めてポイって捨てよう！いやっほい！

ということとで設定の練り直した。戦闘中は性格が豹変する？バカ言ってるんじゃないよ。甘い甘い。インドの世界一甘いお菓子、グラブジャムンより甘い。ちなみにこのお菓子、甘すぎて今まで気づかなかったほど小さい虫歯が自分でも分かるぐらいになるほど歯が痛くなるらしい。こわい。

俺は設定を守り抜く意志はある。じゃあどうすればいいか？簡単な話だ。土御門ことツツチーの前で見せつけたあのキャラを突き通せばいい。嘘を嘘で塗り固めてキミだけのサイキョーなキャラクターを作ろう！やかましいわ。

つまり俺がこれから突き落としていくのは「他人に心を開かない不思議な感じのする少女」だ。でもこれじゃさあ、マンネリなんだよな。いくらでもこんなやついるっついの。ウチの高校にもそんなやついるんじゃないかね？絶対いるだろ、後から仲間に加わって加入する追加DL系キャラでいるよこんなやつ。最後は主人公に心を開いてクールなツラをかなぐり捨ててるんだよ。俺は知ってる。ラノベで死ぬほど見た。そして何度キャラ崩壊に涙を呑んだことか。でも悲しいかな、俺にはこれをベースにするしかない。コピールはできるけど応用が効かないのが俺の欠点だ。こういうのは大学受験で志望校に落ちる。まだ大学受験してないけど。

うーん、悩ましいな。このベースのキャラに本来の俺の性格を混ぜ込んでやるとかはどうかだろう？たとえば他人には普通だけどー人だけに対してめちやくちや冷たいとか。いやボツだわ、なんか単純にイヤなやつになっちゃう。

あ！そうだ！いい案思い付いた！「怪異とそれを倒すものを憎む執着心の強い少女」ってのはどうだろうか！？なかなかいい線いってると思う。怪異を憎みすぎて一周回ってそれを倒す人間すら憎悪の対象的な。これだと、パンチが強すぎず弱すぎずの重い過去を背負ってる的なキャラだろう。実際怪異は憎んでるけど、それを倒す人間を憎むほどではない。まあそんな人間いないだろうけど、キャラ付けなんだし仕方がない。俺はこのキャラで行く。

「よっしやあ! いくぞオ!」

「……大丈夫? どうしたの?」

「うえあつへ!」

うわあ! なんだコイツ!? ビックリしたわホンマ……。発破をかけて立ち上がったら急に横から声かけられたモンだから腰抜かすかと思った。

「えと……ごめんね? 大丈夫?」

「あ、や、大丈夫です……」

「見たところあなたも私と同じ高校でしょう? なんで男子用の制服着てるかは知らないけれど。何年生? 私は2年の宮本。宮本みやもと 梓織しおりよ。あなたは?」

よく喋るなあこの子。でも、あれ? 宮本みやもと 梓織しおりよ。あなたと同じクラスのやつだったよな。ツッチーと仲のいい女子だつて記憶。ちなみに俺は彼女に親の仇を見るような目で見られている。理由は間違えて女子更衣室にツッチーと突入しちゃったから。なぜか俺だけが罪を全て着せられて、クラスの女子からはガチのマジで蔑まれている。その事件のおかげで俺はクラスの男子内で英雄になれたのは別の話だが。恥ずべき成功より誇れる失敗だ。ん? でもこれ両方失敗だよな。

「あ……俺は長波です。長波ながなみ 那月なつきです」

「長波ね……そんな子いなかったような気がするけど……」

「いや、転入生です転入生。明日からですよ」

「ふうん……」

やばい。嘘がバレそう。ちなみに長波つてのは母さんの旧姓で、那月は冬紀から連想した季節。春だとツツチーと被る、夏なら大丈夫という算段。

「じゃ、俺はこれで……」

「待ちなさいよ。そんなズタボロの姿で大丈夫なの？」

「家が近いので……いや、マジのガチでほんとですよ。……じゃ、失礼しまーす」

「ちよつと……」

後ろから何か言われてる気がするが気にしない気にしない。気にしたら負けだ。

クソ、にしても今日は厄日だ。会いたくないやつに会うし、最悪のタイムミングで同級生にも声をかけられる。踏んだり蹴つたりの日だ。もう家に帰って布団かぶって寝よう。

……父さんと母さんに、今の状況なんて説明しよう……。

## 万里の波濤を乗り越えて

「と、いうわけです」

「ごめんもう一回最初っから説明してもらっていい？」

家に帰るなり警察に通報されかけたので懇切丁寧に説明したんです。やめてください、聞き直してくるのは。傷つくんで。懇切丁寧に説明したっていうのに鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしてやがる。

「だからつまり、かくかくしかじかの経緯で怪異に女の子にされちゃった、ということですよ」

「……さっぱりわからん。母さん何か言ってやってくれ、父さんは頭が動作不良起こすぞうだ」

「理解できたら苦労しないわよ……」

父さんエラーの母さんフリーズらしい。これ俺がエンジニアだったら1発でクビになつてそんな布陣だと思う。プログラム書いたことないしC言語とか一切わからないけど、エラーとフリーズってなんかこう、一番やつちやいけないような感じする。ゲーム中とかにブルスク吐かれたらたまったもんじゃないしな。

いやしかし悲しいかな、親にすら理解してもらえないというのは。多分3回ぐらい経緯を説明していると思う。それなのに一向に理解してもらえないのは多分脳が理解を拒否してるんだなあ。

「まあ、でも。冬紀だということは疑いようのない真実だ……と思う。話し方とかはソックリだし。ただ、父さんたちはあまりに唐突なことでびっくりしてるんだ。学校はどうする？服は？これからの生活は？」

「……まだ何も……考えてないです……けど、その公園でたまたま会った同級生には明日から学校に登校する転入生、って答えました……」

「オイ」

改めて考えると最悪の一手を打ったような気がする。名前擬装、経歴擬装のツアアウト。野球ならピンチですよピンチ。つてもうほぼ限りなくピンチなだけだな。アツハツハ。だめだこりゃ。

こいつはヘビーだぜ。今ならマーティ・マクフライの気持ちもわかるうよ。

「冬紀……あんた分かってる？今の状況、誰が見ても卒倒するわよ」

「わかってるよ。誰よりも。だからこそ、だからこそ隠し通さねばならないんだよ。特にツツチーには絶対に隠し通す」

そう。あいつにだけはバレたくない。絶対めちやくちやな手を使ってまで戻そうと

してくるだろうし、何よりもう戻る見込みなさそうだからそんな事されたら俺死んじやう。お嫁に行けないよ。

「わかってるならどうするの？そこまでの覚悟があるなら、私たちも止めやしない。バックアップはするわよ」

「えっ!?母さん、まだ何も決めたわけじゃ……」

「あなたは黙ってて」

おい父さん。もつと何か言うことあったる。そんなすごごと引き下がられたら父親の面目丸潰れだよ。もうちよつと粘れよ！こう……なんでもいいからさ！「ワシが決める！」ぐらい粘ってくれた方がもうちよつとかっこよかったのに！

「……あの、ひとついいですか」

「どうぞ」

「その同級生に偽名で名乗っちゃったんですけど……」

「は？」

「すいません……」

リビング・デッド。生きながらにして死んでいるとはまさに今の俺にぴったりの言葉だ。明らかに凍りついたリビングの空気も含めて。

凍りついた池を叩き割るように、ひとつ咳払いをしてから父さんが口を開いた。



「……やると決めたら、やれ」

その言葉には、どこか重々しい響きがあった。

「やると決めたら、やれ。自分の問題だ。他人がどう言おうが干渉できることじゃない。ただ、さつき母さんが言ったみたいにバックアップはする。約束しよう。だから、今ここで、やる事を決めてくれ」

普段おちやらけた父さんからは想像もできないような威厳のある声で、そう告げた。俺は考える。どうすればいいかを。どうすべきかを。どうすれば最善かを。

最善なんてのではない、そもそも公園で宮本さんに会ってテキトーなことをペラペラ喋っちゃったから。ならばどうすべきか？初志貫徹、言ったことを現実にしてやればいい。

「父さん、母さん。頼みがあります。偽名使っちゃったから戸籍をなんやかんやして現実のモノにしてほしいのと、高校への編入手続きをしてほしいです。あと、友達が訪ねてきても俺のことは隠してください」

自分でも凶々しいと思う。ただ、父さんと母さんにはこれができるほどの力がある。はず。母さんはお役所勤めだからその辺どうにかしてくれるだろう。父さんは何やってるか知らないけど、まあ力にはなってくれるだろう。

「よおしわかった。母さん、戸籍の件について頼める？」

「まあ納得はいかないけど……やれってんなら、やるわよ」

「さっすが!」

あ、やべ。最後のは余計だった。二人にめっちゃ白い目で見られてる。ごめんってば、悪かったって。

「とりあえず制服は私の使いな。そんなボロボロになってちや使おうにも使えないでしょ?」

「えっ、母さん制服なんてまだ残してんの?」

「野暮用でね……」

おい。さっきまで白い目で見てきたくせに次は目を逸らそうとするな。ちゃんと目を見て話せ目を見て。

しかし助かった。まだ6月で夏服の時期なのに、冬服の学ランを羽織って学校行くハメにならなくてよかった。夏にそんなもん着てるのは、ステレオタイプの露出狂かコスプレイヤーだけだと思う。

「じゃあ俺は部屋戻るよ。色々、ありがとうね」

「息子だからな。力になるのは当たり前だ」

「そうそう。あ、明後日から私たち北海道の実家に戻るから。1週間ぐらいかな?とりあえずお留守番よろしくウー!」

は？ズルいぞアンタら。俺も連れてけよ……って言おうとしたけど、今この状況じゃ無理だ。多大なる貸しがある。ここは黙って従おう。とつとと2階の自分の部屋に引きこもってやれ。……ちつくしよー、札幌ラーメン食べたかったのに。明日作ろ。

「はあ……疲れたあ……」

ベッドの上に手足を投げ出す。思ったより疲れていたらしく、寝転がった途端に手足が棒のように動かなくなってしまった。

思えば今日一日が濃すぎたからかもしれない。だつてよく考えてみるよ、死を覚悟して自爆したら生き残ったばっかりか女の子になっちまって、さらにそれを見られて、そのあと同級生に遭遇して冷汗ダラダラ流しながら嘘八百よ。こんな事つてある？無いっしょ、もう1日が3日ぐらいに感じられたよ。寿命も30年ぐらい縮んだような気がする。勘弁してくれよ。そもそもさあ、なんで俺なんだよ。俺じゃなくてもよかつたじゃん。もっと劇的なドラマ的背景のある人間選んでくれよ。そつちの方がまだ物語的にも見てて楽しそうだし。

ばつかくせえ。寝て起きたら元に戻ってねえかな。あ、でもそれじゃ父さんと母さんの頑張りが無駄になっちまうな。ついさつき玄関の扉閉まる音が聞こえたし、書類改竄しに行つたんだらうか。こんな平日の夕方に大丈夫なのか、銀行強盗みたいに脅迫し

でしたら俺は泡食ってぶっ倒れるかもしれん。

「あ、いかん。眠気が……」

やばい。段々と眠気に逆らえなくなってきた。深いプールで溺れてるみたいな感覚。もがこうとしても中途半端に浮くだけで、徐々に徐々に底まで引つ張って沈められるよな。

今眠るわけにはいかない。今寝たら深夜の変な時間に起きそうだから。この姿だったらなおのこと、夕飯を逃して腹ペコのまま深夜徘徊するわけにはいかない。というか今の身体だと腹具合とかどうなってるの？まだ何も食べてないからわかんないけど、前よりは確実に食べられないだろうなどは薄々わかる。というか前と同じぐらい食べれたらそれはそれで怖い。

ダメだよつば、もう無理眠い。今日はもう寝ます。明日考えりゃいいや、明日。あ、でも明日もう学校行くんだったな……。

夢を見た。

俺は自分の部屋の椅子に座っている。身体は前の状態、つまり「長波 那月」ではなく「深山 冬紀」なのだ。

「よう、やっとコンタクトがとれるな」

見なかったことにしておきたい。見なかったことにしておきたいのだが……どうしても無視できない。

「ん？ 聞こえてる？」

「……聞こえてるよ」

ああ、俺はとんでもなく疲れてるんだろな。

俺のベッドの上には、こうなった原因であろう羊頭の悪魔があぐらをかいて鎮座していた。

## ヤギってなんだよ

「やっぱ俺、疲れてんだろうなあ……」

「オイ、ちよつとぐらい話聞いてくれよ」

目の前の忌々しい悪魔が呆れたように呟く。勘弁してくれよ、俺もう脳みそがキャパオーバーでそろそろ動作不良起こしそうなんだけど。

キレそう。いやもうキレル。今日という今日はキレてやる。覚悟しろよ。

「だいたいさあ……今日が濃すぎる1日なんだよ！こんな事なつてたら俺は一体どうしろってんだよ！俺は何か、神か!」

「ひいつ……!?!ごめんつてば、悪かったよ……」

なんだこいつ。見た目によらず案外弱そうなやつだな。押したらなんかいけそうな気がする。はよ帰つてもらおう。

「そもそもお前の見た目が気に食わないんだよな、なんだよその羊の頭に人間の身体つて。ちよつとひねくれた中学生の考えた悪役かよ。純粹な中二病の方がまだマシだぞ！ええ!?!オイ引きこもり！聞いてんのか!?!」

「そんなキレんでも……」

「これでキレずにいられるかよ！かーっ！ペッ！」

「じゃあそんなにキレルなら話聞いてください！」

くそう。分かったよ、聞いてやろうじゃないの。でももしロクでもないこと言い出したらぶん殴ろうと思う。例えば、金魚は食べたら苦いだとか。

「よしわかった聞こうじゃないか」

「……原因はよくわからない。でも事実つてことだけは理解しておいてほしい。あ、ちなみにこれ羊じゃなくて山羊ね。よく間違われるから気をつけてくれたまえよ」

「え、知らんかった……」

衝撃の事実。知らなかった、そんなこと。

いやちよつと待てよ。山羊も羊つて漢字入つてるし実質羊だから俺が正しいつてことだよな？なーんだ、簡単な話じゃん。

「もうこの際それには何も言わないけど……。とりあえず結論から言うと、自分はこのから出れません」

「え？」

「もつと詳しく言うと、なんか呪いと自爆の影響で魔力が化学反応を起こして思念体になつちまつたみたいで……」

「うわっ、怖いっ。その見た目で呪いとか思念体とか言うな」

そもそも思念体ってなんだよ、言ってることがさっぱりわからん。言語明瞭、意味不明。言語不明瞭よりもことさらタチが悪い。

「さつきから見た目見た目ってうるさいぞ。じゃあこうすればいいか?」

そう言ったなり、羊……もとい、山羊の頭のとっぺんあたりが眩い光を発していく。それは徐々に全身を覆い、後光が差しているようにすら見える。悪魔のくせに生意気なやつめ、もうちよつと節度を弁える節度を。

光が収束すると、そこには「俺」が立っていた。冬紀の方ではなく、那月の方が。しかし差異はある。顔立ちはそっくりなもの髪は銀色ではなく黒色だし、瞳の色も赤ではなく金。どこのかも知らない白のセーラー服の上からモッズコートを羽織っていて、どこか黒猫を想起させるような気品がある。もし現実でこんな子が俺のベッドに腰掛けていたら心臓がバクバク鳴るだろうけど、今の俺は別の意味で心臓バクバクですよ。こわい。たすけて。

「これでどうじゃ? まったく! 最近の人間ってのは人使い……いや悪魔使い? が荒いのう」

「うわあ! 急にキャラ変えるんじゃないやねえ!」

「ワシはこれが素じゃ」

冗談はよしてくれ……。俺の2Pカラーみたいな見た目してるくせに俺より上品そ



うな見た目で、しかものじやロリってなんだよ。属性の玉手箱かよ。いまこんな属性モリモリっ子はオタク受け悪いんだぞ。わかってんのかおい、わかってたら俺にもその気品のカケラをよこせ。

「あの、お名前伺ってもよろしいでしょうか？」

「なんじゃその腰の低さは……」

「いえ、僕はこれが素です」

「嘘をつくな嘘を」

もうね、降参。降伏です。サレンダーしまゝす。勝てるわけがないからね。長いものには巻かれましょう。

「ワシは……そうじゃな……名は、バフオメット。サタナキアと呼ぶ者もおるかの」

「ふくん……なんかどつかで聞いたことあるような……」

「じゃろ？じゃろ？まあワシ有名じゃからな！」

俺は知らなかったけどね。テキトー言っただけです。学校の怪異についての知識の授業とか寝てたし。テストもないし、対魔術の授業なんてみんな寝てるから起きとく意味無いと思うんですけどね。あれはもう睡眠のボーナスタイムよ。俺に少しでも能力があつたなら真面目に受けたかもしれないけど、無能力の一般人があんな授業まともに受けても意味がない。怪異に会ったらどうしようにも対抗できないからもう、デッド・

エンドよ。

しかしまあ、随分軽い悪魔ですこと。ノリも軽いしチョロいして心配になる。ええんか？こんな悪魔抱えてて。悪魔どもの未来は暗いと思う。俺が魔王なら真っ先にクビして思う。まあこれで能力が突出してるなら黙るけど。

「あ、忘れておった。本題じゃ本題」

「え、もう明日にしませんか？ちよつと処理しきれないんで」

「あほ！ここは夢ん中じゃから疲れるとかないわ！」

「あ、そういう……」

「ごほん！と咳払いをして、もったいぶった口調で目の前にいるのじゃロリが口を開く。

「まず結論から言うと、ワシは外に出れん。このお主の『頭の中』だけの存在になったわけじゃ。これがさつき言った思念体、って意味じゃな」

「ふうん」

「あ、こら！まともに聞いてないじゃろ！お主にも影響あるんじゃぞ！」

「俺の2Pカラーみたいな色してくるくせに偉そうなこと言いやがって……！」

「そんな事どうでもよかろう。それを言うならワシがオリジナルじゃからお主が2Pじゃな。やーい」

後で殺す。このクソガキ(?)は後で絶対に殺す。覚悟の準備をしておいてください。

「お? いいのかそんな口きいて?ここから出れないんですよね、バフォメットさん?」

「あ、そうじゃったそうじゃった。というわけで多分大丈夫じゃと思うけど、悪魔どもがお主を始末しにくるかもしれないの。それが伝えたかったんじや」

「……は?!?!じゃあ何か!?!俺はこの歳で死……死ぬのか……?イヤだ……死にたくない……!?!」

「かーっ、大袈裟なヤツじやのー。そこでワシが直々に指南をしてやろうという算段じゃぞ?ワシだって不本意じゃけど、お主が死んだらどうなるかわからん。とりあえずもう少しその身体に慣れたら起きててもワシと会話できるハズじゃから、なんか困ったらワシを呼んでくれ」

まったくもー、といった風にバフォメットが放った言葉は、俺の頭の中でぐるぐると回り始めて止まる気配がなかった。俺のような無能力者が悪魔どもとどうやって戦うのか?そもそもなぜ悪魔に狙われるのな?意味がわからない。わかりたくない。

もう間違いなく最低最悪の年に違いない。1年分の不幸が1日してやってきたような気分。もつと分散させてくれ、この分配で考えたヤツはキーキを均等に切り分けられないタイプに違いない。パーティーで切り分け失敗して空気をめちやくちや白けさせるやつだ。

「はあ……」

「ため息を吐くと幸せが逃げるそうじゃぞ」

「もうとことん逃げられてますけど」

これからどうしよう。

恨めしげに目の前の悪魔に目をやると、すっかり板についたような様子でベッドに寝転がって、枕元に転がしてあったマンガを楽しそうに読んでいる。いいのかこれで。

「ところで、なんで俺が悪魔どもと戦う可能性が出てんの？」

「ああそれはじゃな。まあ要するにワシは向こう側……つまり悪魔の王国、人間で言うところの冥界？じゃと皇帝に直接謁見できる6柱の上級聖霊の1人じゃからの。それがいつまで経っても帰ってこない上に、2Pカラーみたいなやつが人間と仲良くしてたら裏切ったと思われるじゃろ」

「なるほど！わかりやすい！」

「じゃろ？まあワシ上級聖霊じゃし？」

いや、なるほどではない。理屈は理解したが納得できないし、なによりも納得したくない。こういう悲しい結果で、終わり……ですね。

しかし一縷の希望はある。さっき『ワシがアシストしちやる』的な事言ってたし、もしかしたらワンチャンどうにかなるかもしれない。マンガを大笑いしながら読んでい

るこんなやつに指示を仰ぐのは癪だが、街中で暴れ回った時のこいつの力はホンモノだった。

ん？街中で暴れ回ってた時？あれ？よく考えたらコイツが全ての元凶なんじゃね？

「……か」

「ん？なんじゃ？もつと大きな声で……」

「お前かあああああああ！！！！」

「な、なんじゃあ急に!？」

！！！！

「お前が全ての元凶なんじゃねえか！お前があんなところで暴れ回んなきゃ俺は今普通に生活できたものを！」

「痛い痛い！ギブ！ギブ！ベッドロックはやめるのじゃ！」

「そもそも呪いとかなんだよボケが！お前はとつと冥界に帰れ！」

「呪いも本来はお主が死ぬような呪いをかけたつもりなんじゃけど！……ちよ、痛い痛い！マジでやめてほしいのじゃ！ワシが悪かったのじゃ！」

聞こえないフリをしてヘッドロックでギリギリと締め上げる。もう許さねえ、従順になるまでやるからな今日は。どちらが上か思い知らせてやる。

……これどう見ても俺が女の子に暴力を振るってる悪者だわ。街中でこんなのをいた

ら絶対誰か止めてる。でもこいつ呪いで俺を殺そうとしてたらしいし、俺の頭ん中のできごとだからもういいや。気が済むまでやってやる。悪魔と戦う時の予行演習だ。ヘッドロックごときで死ぬかは知らないけど痛いって言うてるし効くだろう。逆に効かなかつたら対抗手段がない。

わかつてる。単純にストレスをぶつけてるだけだと。でもこうしてないと、マジで現実で発狂しそうになるから辛い。起きたらこの腕力とかもグレードダウンしてるわけだし、今のうちにやっておこうという打算的な考えがあることも全部理解している。

「痛い痛……くない。あれ？終わり？」

「なんか自己嫌悪に陥ってきた……」

「安心せい。お主はワシが死なさん。死んでもどうにかしてやるのじや。悪魔の大將を舐めてもらっては困るのじや」

どうしてだろう。なぜか頼もしく見えるのは。これが悪魔の大將の貫禄というものか。そんなものはトイレに流してきたと思っただけだが、なかなかどうして満ち満ち溢れている。これならどうにかなるかもしれない。いや、どうにかやってやる。俺だつて死にたくない。だから生きる為の策を練るしかない。人間というのは小賢しい策を張り巡らせてここまで発展してきたんだ、今さらこんな怪異どもに負けてたまるか。

まずは戦い方を、と思ったところで周囲の風景がぼやけてきた。これは一体何だろう

か。

「お、タイムリミットじゃな。とりあえずまだ少しの間はワシと会えるのが夢の中だけじゃから今日の夜も頼むぞ！」

「いや普通に寝かせてください」

「……死んでもいいなら寝てもよいぞ？」

「あ、なんか眠気なくなってきたかも！いやあ楽しみ楽しみ！」

周囲の風景が水に絵の具を溶かすようにして薄くなってきたところで、俺の意識も薄れてきた。クソ、まだやんなきゃいけないことが山積みだつていうのに。この気分の悪さは溜め込んだ課題をやっている最中に寝落ちしてしまった時のような感じがある。

「その変わり身の早さだけは悪魔にも引けをとらんの……」

おい。お前今なんつった、と口を開こうとしたが言葉が出てこない。突つかかろうとしたのも虚しく、その言葉を最後に意識が途切れた。

# お料理、得意なんです！

絶望の起床。寝覚めは最悪。

どこかのアホ悪魔との死闘でバキバキに画面が割れたスマホの内カメラで自分を写してみると、もちろん身体が元に戻っているハズもなく、目付きの悪い眠そうな少女が写っている。腰まで届いている髪はハッキリ言って邪魔でしかないが切るのも抵抗がある。どうすつかないこれ……処遇に悩む。もし教師とかに長すぎるから切れって言われたら大暴れしてやろう。学校で大暴れするのが夢だったんだ。夢、叶えます。

これは余裕があるからふざけているのではなく余裕がなさすぎてふざけているのだ。いや、ふざけている場合ではない。たとえ俺の身に何が起ころうとも学校は日曜日と長期休暇以外行かねばならない。それが社会というものだ。まあ、高校生が社会について語るなど言われれば黙らざるを得ない。

布団を被ったままぼーつと虚空を見つめっていると、最初はぽつぽつと、しかしいつの間にかばたばたと激しく窓を叩く音が聞こえてきた。ひよつとしなくても雨だろう。2割増しぐらいで学校に行きたくなくなってきた。俺は片手が塞がるから傘が嫌いなんだ。あと単純に少しづつ濡れるのが嫌すぎる。友達からは風呂に入るのを嫌がる猫



みたいだと笑われるほどに、雨という自然現象が嫌いなのだ。

ごろりと頭を転がして机の上の時計に目をやると、6時30分を指したまま秒針がコチコチと動いている。もう一眠りしようかなと目を閉じようとしたところで、机の上の違和感に気付く。ど真ん中に鎮座している目覚まし時計は違和感なし。乱雑に積み上げられた参考書……はいつも通り。PCのモニターもキーボードも普通。机の隅っこにある白いセーラー服も……ん？セーラー服!?

「ドワア!!なんじゃこりゃ!!」

セーラー服です。

俺はこんな物に見覚えはないぞ。たしかにセーラー服を脱がせたいなと思ったことはあるけど、着たいと思ったことはない。本当に。少なくとも、俺に女装癖はない。

しかしこのセーラー服、よく見てみるとどこかで見たようなデザインをしている。そう、さつきまで俺と話をしていたバフォメットが着ていたような……。……。ん？バフォメットの着ていた服？

改めてセーラー服に目を向ける。なんとびっくりデザインほぼ一緒。ほぼ？いやもう一緒です。対戦ありがとうございました。

オオイどうなってんだ一体？あいつは俺の意識の中でしか存在し得ないって言ってたよな？じゃあどうしてこんなものが？なんかもう考えたくなくなってきた。バカに

なりたい。あ、もとかからバカか。バカで弱くて無能力で脳内で悪魔飼つてるとか役満超えて国士無双でしかない。せめて俺にも何か能力があればと思う。だがしかし悲しいかな、現実是非情。そんなものはない。

もう考えるのもめんどくさいので、尺取り虫のように布団から這い出て一階の居間に降りる。母上と父上は明日から北海道かどこかに行くらしいけど、俺学校あるんだよな。休みたかったけど、親には多大なる借りがあから無理は言えない。でもなあ……行きたかったなあ……北海道。うまい魚が食べたいよ俺は。中学校の時に修学旅行で行ったけど、自由時間の散策中に同じ班の人からはぐれてずっと一人で行動してたのを思い出すと悲しくなる。あ、いかん、涙が。視界がぼやけてあやうく階段を踏み外して落ちるところだった。

「おはようございま〜す」

……?

「おつはようございま〜っ。」

返答ナシ。

おかしい。俺が起きてくる頃にはリビングにはもう父さんも母さんもいて、起床の遅さに毎朝白い目で見られるのに。あれやめてほしいんだよ、朝ごはん食べづらいしなん

かちよつと、ほんの少しだけ申し訳なきがあるから。

静寂。もはや静かすぎて耳鳴りがするほどの、静寂。聴こえてくるのは自分の心臓の音のみ。

これでは埒があかない。天を仰ぐようにしてリビングをぐるりと一通り見回した俺は、その瞬間、稲妻に打たれたようにあるひとつの恐るべき仮説にたどり着いた。学会追放も覚悟の上の、その仮説とは――。

本日祝日説。

え、もしかして今日休み!? 休日っすかあ!? 学校行かないでいいってマジ!?

そんなわけないだろ。何言ってるんだ俺。今日は金曜日だぞ。バリバリ学校あるわ。なんなら明日も半ドンであるぞ。じゃあ、なんで? もしかして早く起きすぎた? いやそんなハズがない。俺が起きたのは6:30あたりだぞ。遅すぎず早すぎずのいい時間だと思っただけ、一体全体どうなってるんだ?

わけがわからん。俺にドッキリでも仕掛けてるのかと疑うほどに音すら出さない。己自身は朝にとてつもなく弱いので、今ドッキリなんてされたらイライラしすぎて扉のひとつふたつブチ壊してしまいそうな気がする。

冗談ならとつと出てきてくれ、と思いつながらリビングをウロウロしようとする、ふと食卓の上の紙に目がいく。さては親父がまたとりとめのないチラシなんかを家に

持つて帰つてきやがったな、なんて思いながら手に取つて一通り読むと、俺はその紙をぐしやぐしやに丸めてゴミ箱に勢いよく叩きつけて。吠えた。

「なぐにが置き手紙じゃ！俺の緊張感を返せ！」

置き手紙。そう、置き手紙でした。ふざけんな！本気で怖かつたんだぞ！しかもめちやくちやテキトーな、いかにも急ぎで書きましたみたいな字しやがって。その割に内容は『実は向こうに行くの今日つてこと忘れてました！w』だし、あとは本当に食費とかの話だった。……ん？そういえば追伸つて書いてるところがあつたけどあまりにも怒りが強すぎて読み飛ばしてたな。

あくびをしながらキツチンに向かい、手紙を丸めて叩きつけたゴミ箱を漁る。まあ漁ると言つてもゴミの一番上に置いてるみたいなモンだし、誤差誤差。

丸めた手紙を引き伸ばし、砕けた字で最後の方にボソボソと書いてある、人に読ませる気があるのかすらわからないような追伸を読もうとする。親父よ、もっと字は綺麗に書かんかい。

『追伸。制服はあなたの机の上に置いておきました。白いセーラー服です。かわいいですね。ワケアリですがやましいことには何も使っていないので文句は言えるならお母さんに言つてください。お身体にだけは気をつけて。敬具。』……………親父、やましいこととか性癖のことについてはもういつそ割り切るからワケアリの理由を教えて

くれよ……」

いまさら知りたく無かった父親の性癖。これもう犯罪者だろ、通報ですよ通報。

しかしまあ謎だ。謎でしかない。なぜ母上がバフオメツトの着てたヤツと同じ制服を？と、そこまで考えて気がついた。そういえば母君が自分の学校生活のことに言及した時などあつたらうか。いや、ない。見えたぜ！隙の糸！だとするならば、ここから導かれる結論は――。

わからん。さっぱりわからん。もう考えるだけ無駄な気がするので、二度漬けと深読みは厳禁にします。IQ30ぐらいまで低下させます！

「まーシリアスなこと考えなくていつか！」

こうやってわざわざ口に出して言うあたり、気にしてんだろうなくと頭の片隅では思うのだが、無理矢理気が付いていないフリをして蓋をする。臭いものには蓋理論が大好きなのだ、俺は。「臭いものに蓋」は簡単に言うと「めんどくさいものは頭の中から削除」だと信じて疑っていないので、昔のいい加減な人間に感謝している。ありがとな！こんな便利な言葉作ってくれて！

ぐう。と場違いなほどかわいい音が鳴ったので、あたりをキョロキョロと見回す。なんだ今の女の子みたいな腹の鳴る音は。ここに女の子なんていないぞ。

……あつ、俺かあ!

腹が減っては戦ができぬ。

料理がうますぎて友達から、かの有名なシェフである『リョウ・リー・ウマイ』のとき腕とさえ呼ばれる、俺の料理を見せて進ぜよう。

まず冷蔵庫から昨日の白米の残りを取り出します。それを茶碗に食べられる量だけ入れ、ラップをして電子レンジで温めます。次に、また同じく冷蔵庫から卵を取り出し、調味料の棚に置いてある醤油も一緒に食卓に置きます。最後に、温めた白米の上に卵を落とし、醤油と一緒に混ぜたら完成です。ライスオンエッグ、またの名を卵かけご飯という料理の。

手を合わせて、いただきます。勢いよくかき込む。うまい。相も変わらず、うまい。ただそれ以上でもそれ以下でもなく、常に合格点を出してくれるこの卵かけご飯には、素直に感謝です。負けました、卵かけご飯、好きです。

何言つてんだ俺は。食べ終わったところで賢者タイムが発動し、呆然としたまま食器を片付ける。洗うのめんどくさいし家帰ったらやろう、と思いつながら歯を磨いて顔を洗う。顔を上げると、洗面器の上にある鏡に自分の顔がハッキリと写る。いつ見ても慣れない、慣れたくないこの顔。前はもつとつまねえ顔してたのになあ……。こんな個性バチバチマンみたいな可愛い顔になっちゃった。そもそも顔うんぬん以前に一番困る

のは視点が低くなったことだけ。頭ひとつ分視点が違うから色々不便すぎる。前が175cmピツタリだったけど、今はどれくらいだろうか。バフオメツトを見てると160cmぐらいだと思っただけど、あいつと俺は身長も一緒なのか？

身長で困るなら服のサイズとかも色々変わるしなあ。昨日はタンクトップだけで寝たから大して気にしなかったけど、今後は普通の服も着るわけだし丈が違々とブカブカになって着れたもんじゃない。服を買うのに崩すか、俺が小学生の頃から一度も手を出さずに貯めていたヘソクリを。

嘆息しながら階段を登り、自分の部屋に戻ってセーラー服さんと対戦よろしくお願ひしますしたところでハタと気が付いた。

俺、この服の着る方法、しらねえわ。

## 交代してくれ

で。どうすべきか。いま俺は、俺の中の全力を振り絞って考えている。わからないことというのは当然ネットに頼ればいいのだろうけれど、なんか今ネットでこういうのを調べちゃいけないような気がする。こう……説明できない気分がある。敗北感？いや違うな……。まあいいや、いやよくないけど。この今の状況を打開しなければいいものもよくないし、よくないものもいい。何言ってるんだろうな。脳みそがフル回転しすぎてこういうこと言っていないと何しかわかわからないから喋り続けるしかない。本当に俺と言う人間は欠陥製品すぎる。涙が出てきそうだ。

こんなことならセーラー服を脱がしたい趣味じゃなくて着る趣味も持つておくんだった。こういう時のために使えるということがわかったので、これからは本当に一切理解できないようなことを趣味にしている人にももつと理解しようと思う。彼らは“来るべき時”に備えて訓練を積んでいるのだと思えば何かの特殊部隊かのようにすら思えてくる。間違いなく特殊性癖部隊ではあるだろうけれども。

天を仰ぐ。為す術なし。ここはもうスマホに頼るしかないのか。しかしここでスマホで調べてしまったら俺は会社の検索履歴に「セーラー服の着方を調べるやつ」として



一生記録に残ってしまう。そんな変態と勘違いされるのはまっぴらごめんなので、記録を消すようにサーバーに説教してやりたい。所詮ヒトに作られた機械のくせに偉そうにしやがって、人間様ナメンじゃないわよ！

『……もどかしいのう、ワシに貸せ！』

そういえば風呂場にベルトを置き忘れていたような気がする。ちなみに身体を見たくなかったから目隠ししながらシャワーを浴びていたら、そのせいで石鹸で足を滑らせて危うくポックリ死ぬところだった。まさに踏んだり蹴ったり。地雷は踏むわ石鹸は蹴飛ばすわで散々すぎるからいい加減お祓いしようか真剣に悩んでる。

『あれ？聞こえてないのか？おーい、返事せんか』

もうめんどくさいから学校サボろうかな。ちよつとぐらい休んでも……バレへんか。なんか幻聴も聞こえてきたし、みんなが働いたり授業受けてたりしてる中、布団かぶってスヤスヤしとく方が得策だと思うような気がする。やっぱ俺天才かもしれないわ、ということでもう今日は休む。休みまゝす。理由？精神的ストレスに起因する幻聴”とということをお願いします。

『幻聴なわけあるか！やっぱワシの声聞こえとるな、お主！』

『……なんすかもう……！てかあなたさつき、夢の中でしか会えないみたいなこと言っ  
てなかつた？』

幻聴だと思いたかったけど、そうは問屋がおろさないらしい。頭の中に直接語りかけてくるように声が響き、俺の頭で喚き散らす。気分はさながら神託を受けたジャンヌ・ダルクのよう。これどうやって相手と会話できてるんだろうか。自分の中では念話的なサムシングだと思っている。強く思うと相手に伝わる感じ。

現実とはいかなる時も非情に、冷酷に進んでいく。バイアスという単語が俺自身を嘲笑っている声が聞こえてくるような気がする。

そういえば、俺の記憶が正しいとするなら、ヤツは『ワシと会えるの夢の中だけだから明日もよろしくな』みたいな事を言ってたと思う。俺が目覚める少し前の、おぼろげに覚えている部分だからもしかしたら記憶違いかもしれないが。にしてもなんか腹立ってきたな。なんで俺がこんなことしなきゃなんねえんだよ。

『まあまあ落ち着くのじゃ。せつかくワシと会話できてるんじやからもっと嬉しそうにせんか』

『わーい』

このクソ悪魔、どの立場から物申してるのだろうか。俺はもう怖くなってきた。こいつを幹部に起用するような冥界の人材の少なさ、層の薄さ、トップの無能さが。冥界はもう終わりや、人類はもうこれから特に何もしないで悪魔どもに勝てると思う。逆に今までなんでこんなやつらと人類史をかけた死闘を繰り返していったか理解できないほ

どに、肩すかしを食らった気分だと、改めてそう思った。

『まあなんじや、それが着たいならワシにお主の身体を貸せ』

『いや、もう学校休もうと思っただけだ』

『あほ！学校にはちゃんと行け！』

悪魔がそれを言うか。真面目かよ。

というか今、『ワシに身体を貸せ』って言わなかったか？という理論なんだ？

そんな疑問をよそにして、バフオメットは喋り続ける。

『ワシに貸してくれたら着替えのやり方とかちゃんと教えるし、今日一日限りならお主の代わりに授業を受けてもよいぞ！どうかの？』

魅力的な提案。たしかに授業を代わってもらえるのはラクだ。でも。

『怖いからやだっ。学校着くまでなら貸してやるからそれで頼む。な？勘弁してよフーちゃん』

『なんじやその呼び方は……。2000年ぐらい生きててはじめて聞いたぞ』

『まあともかく！代われるならとっとと着替えてくれよな！早くしないと遅刻すんだからさーほら、とっととー』

『えらっそくなヤツじやの！誰のおかげで今日学校に行けるのかよく考えるんじや！』  
『親』

『……そうじゃなくて!』

だつて学費出してるの親だし。そもそもこうなつた元凶がお前なんだから自分のケツは自分で拭けよ、と思う。男ならそうするだろうがよ。

『ま、いいのじゃ。いいかの? ワシが合図を出すまで目を瞑つてるのじゃ。さん、にー、いちで手を叩くから、その後には目を開けてうまくいけば交代完了じゃな』

うまくいかなかったら? そのことを考えると不安だ……不安すぎる……。自身の死に際に呪いをかけて、全く違う効果を發揮させた悪魔がこんな自信満々に言うのだから、失敗する予感しかしない。自信満々な時に限つてオチが最悪、というのはよくあることだ。最悪の事態は常に覚悟していなければならぬ。一回死ぬ危険を味わつたのだから、もう二度とそんな目には会いたくはない。だがそこはもう仕方がないと割り切つて、死んだらその時はその時に考えよう。大丈夫、なんか死なねえような気がするし。死んでも俺の責任じゃないから、地獄の沙汰も温情を与えてくれるだろうよ。

『大丈夫大丈夫、安心するのじゃ。お主はワシが死なさん。死なれたらワシからしても困るからのー』

『本当だな? 信じるからな? 言われた通りにやるぞ?』

『悪魔の大将を見くびるでない。成功させると言つたら絶対に成功させるのじゃ』

信じよう。いや、信じるしかない。乗るか反るか、乾坤一擲の大勝負。俺はこいつに

全てを委ねる。だから祈る。どうか成功してくれと。火を灯すことができるようにと。  
『とつととやってくれ。遅刻しちゃうぜ』

『まだ7時15分じゃ。30分あれば着くじやろうが』

『なんで俺の通学事情知ってんの？背筋が冷たくなるんだけど』

『お主の頭ん中の情報ならほぼ全部お取り寄せできるからのおう。ハッキリ覚えていること限定じゃけど、お主の趣味から性癖やら果ては隠し事まで……』

『もういい！はやくしてくれ！』

これマジ？俺他人に脳みその中身見られてんの？考えうる限り最悪じゃん。どうにかならなかったのか、俺の頭は。

『……という前置きは置いて。さあ目を瞑って、深呼吸するのじゃ。とつとと済ますんじやろ？』

言われた通り素直に従い、軽く深呼吸しながら目を瞑る。深く呼吸をした。あたりの空気を吸い込み、そして思い切り吐き出す。さながら、巨大な生き物が肺の空気をそっくり入れ替えるようにして。段々と心を落ち着かせて、無念無想へと歩み寄る。

『そうそう、そのままそのまま。落ち着いてきたじゃろ？……そろそろ数え始めるのじゃ。さん、にー、いーち……ほいっ』

パンツと手を叩くような音が、小気味良く頭の中で爆ぜる。どうなったのか。成功し

たのか？

恐る恐る目を開けると、視界にはさつきと同じ部屋の中の光景が目に見し出される。ああ、失敗か……。……。ん？そういうえば、視点がさつきよりも高い。身体も重いが、なぜか苦にならない、長年共に戦ってきたような安心感がある。

「おー、成功成功。よかったのう！」

音の方を見れば、つけっぱなしのモニターからそんな声が聞こえてくる。覗き込んでみると、これまた俺の部屋が映し出されている。

『ちよつとフーちゃん。これどうなってるの？』

「あ、そうじゃったの。どうも何もそこがお主の頭の中でワシが過ごしとる空間じゃ。夢にも出ておったじやろ。そのモニターから、一人称視点で自分の行動が見えるというわけじゃな」

悪魔の力ってすげー！

わざわざ大きなサイズのモニターを買っておいでよかった。見やすいことこの上ない。神に感謝。

「とりあえず今から着替えの仕方を教えるのじゃ。よく見ておくんじやぞ？」

『頼まあ』

しかしまあ面倒見のいいやつですこと。こんなやつが現実にならいい友達になれ

たと思う。でも悲しいかな、イマジナリーフレンドみたいな扱いにならざるを得ない。俺の意識下でしか生きれないなんて実質上のイマジナリーフレンドでしかないし。他人からしたら妄想だよな。

なんて思ってる間にパパッと着替えをすましたフーちゃんが鏡の前で服装の歪みを直している。鼻歌まじりに機嫌良く、スカートの裾を持ち上げてホコリを払ったり、胸元のリボンを結び直していた。

『そーいやさ、なんで制服着てたの？どっかの高校に潜入してた？』

俺が何気なく質問を投げかけると、照れたように笑って恥ずかしげに語り出した。

「いやあ、これは冥界での学校の制服じゃな。人間と同じような学校があるんじゃないが、男は真つ黒な学ランで女は真つ白なセーラー服と決まっておるのじゃ。懐かしいのう、何百年も前に卒業したけど未だに同窓会やってないんじゃないからみんなヒマじゃないんじゃないやろなあ」

それは多分同窓会に誘われていないだけだと思っただけだと思っただけだ。

でも、じゃあなんでそんなものがウチに転がっているのだろうか。もしかして、これは元々普通の高校にあったやつを悪魔がパクったとか。それか普通にコスプレで売っていたりするとか。真実は母のみぞ知る。

「着替えも終わったしとっとと代わるのじゃ。ワシは漫画が読みたい。お主の記憶を覗

くのは後でやるのじゃ」

『マジで勘弁してください。もしかしてこの本棚にある見覚えのない本に記憶が記してあったりするんですか?』

「お主、勘だけは鋭いのう」

そんなこつたろうと思つたよ。次交代する時に全部焼き尽くそう。机の引き出しの中に新品のマツチが入っているはずだし、ダメになつていなければ次は燃やす。跡形も無く、綺麗さっぱり、一切合切を無に帰す。己の過去も未来も今も焼き尽くそうと、決意した。

「とつとと代わるのじゃ」

先ほどと全く同じ手順で交代する。手を叩く音で目を開ければ、背丈も小さく身体も軽い。不安になるような軽さだ。強い風でも吹こうものなら飛んでいつてしまひそうな弱さを感じる。

学校のカバンを肩から下げ、ビニール傘を持ち、いつものクセで玄関の鏡で身だしなみをチェックしてしまう。

上から下まで真っ白だ。髪も服もスカートも。俺の心とは反比例的で暴力的ですらある。否応なしに白く塗り潰そうとするような。

「いつてきますー!」



むしゃくしゃして、わざと大声でそう叫ぶ。こんな大声を出せば怒られるだろうが今は怒ってくれる人すらいない。そのことに余計に腹が立つ。

力任せに玄関のドアを閉めると、気圧の差で風が出る。そこでようやく、重大なことに気が付くことができた。

このスカートとかいう服、足元がめちやくちやスースーする。世間の皆さんはこんなので歩いていたのか？

これで学校までの約30分耐えられるのか、俺は。できらあ！やってみせろよ。

学校に絶対に遅刻するような時間ではないが、俺は全力で走る。過去から逃げ、今を振り切り、未来へ手を伸ばすように。

思えば嫌な事から逃げてきた人生だった。今さっきもそうだった。

傘がミシミシと不機嫌そうな音を鳴らして揺れるが、構うものかと走る速度を上げる。逃げて逃げて逃げ切ったその先に待ち受けるのは、一体何だろうか。間違いなく報いだろう。逃げた分、その見返りが待っている。だとするのなら、俺はそれすら逃げてみせる。ぶち当たっても駆け抜けてやる。

「うおおおおお!!!」

言葉にできない感情を叫び声に乗せて住宅街を駆け抜け、疲れのあまり立ち止まると、いつの間にか雨は止んでいた。